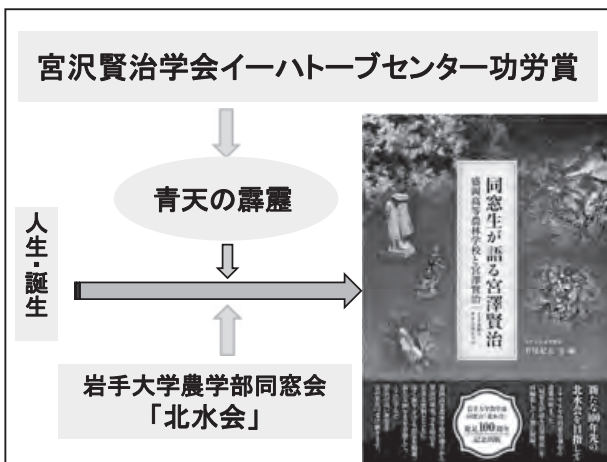


盛岡高等農林学校と宮澤賢治

若尾 紀夫 (C昭39・院41)



この度の宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞は、まさに「晴天の霹靂」であり、ここに有り難くお礼申し上げます。「同窓生が語る宮澤賢治」の発刊は、農学部同窓会「北水会」の全面的なサポートのお陰であると感謝しております。その概要は、お配りの資料（前会長の出版の挨拶・出版の趣旨と経緯・あとがき・目次・コラム欄）を参考にしてください。



農学部同窓会「北水会」について

「北水会」は大正9（1920）年に発足、令和2（2020）年で百周年になります。同窓生は21,000余名に達し各界で活躍しています。「北水会」では活動の柱として「北水会報」を年2回出版しています。令和2年にはさまざまな発足百周年記念事業が予定されていましたが、記念式典はコロナ禍のため2年延び、今年の7月1日に無事開催することができました。

「同窓生が語る宮澤賢治」の出版（令和3年7月1日）は、その記念事業の一環で、平成18年から15年間の連載記事を再編集したものです。

ここで簡単な自己紹介も兼ね、講演「盛岡高等農林学校と宮澤賢治」を進めたいと思います。出身は山梨県。山梨県と言えば、富士山・葡萄・ワイン・桃源郷・水晶や宝石産業などで有名ですが、私の故郷は葡萄の産地・勝沼です。私は昭和35年4月に岩手大学農学部入学のため郷里を離れ、初めて盛岡に参りました。専攻は農芸化学（応用微生物学）ですので、賢治は大先輩に当たります。初来盛から現在まで盛岡に定住、盛岡は「第2の故郷」になりました。



山梨県と賢治との関係は深く、賢治の親友である「保阪嘉内」は山梨県駒井村（現韮崎市）の出身です。賢治は大正4年に盛岡高農農学科第2部に入学、保阪嘉内は1年後の大正5年に農学科第2部に入学し



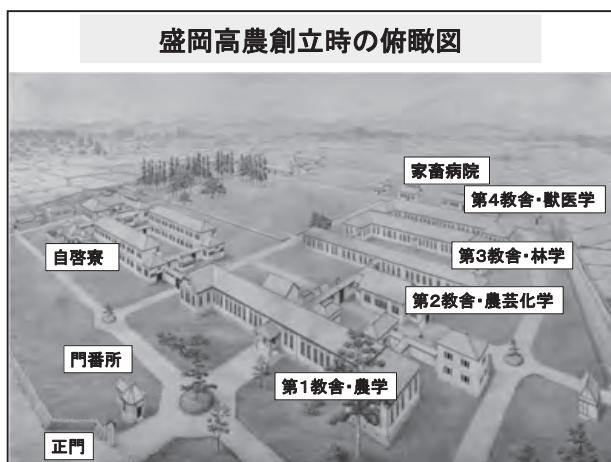
ました。保阪嘉内は寄宿舎（自啓寮）で賢治（室長）と同室で、以降交流が始まり親友となりお互いに大きな影響を受けたと言われます。

盛岡高等農林学校の創立の経緯

創立目的は寒冷地東北地方の冷害凶作の克服と東北農業の振興であります。度重なる早魃と冷害凶作による農村の疲弊を救うとの国の施策に基づき、明治35年に文部省直轄の高等農林専門学校として設置が決まり、明治36年に入学式、明治38年に開校式が挙行されました。

高等農林学校はなぜ盛岡に設置されたのか？幾つかの要因が挙げられます。岩手県は東北地方のほぼ中央に位置し、冷害凶作の常襲地であり、盛岡は東北本線開通により交通の要衝であったこと。広大な学校用地（実験農場及び演習林を含め）が近郊に確保できたこと。岩手県と盛岡市の積極的な誘致活動や支援体制があり、岩手県は10万円（現在の価格で約20億円）を国庫に寄付したこと。盛岡市民の高農設置の期待が大きく誘致に全面協力したこと。上田界限と鉈屋町の有志の誘致運動があり、上田は上田米内地域、鉈屋町は南大橋高崩付近（神子田朝市付近）を推薦、その結果現在地に設置が決定されました。

盛岡高農創立時の体制と人事ですが、農学科・林学科・獣医学科の3学科体制で出発し、第1回入学生は計84名（農学科30名・林学科30名・獣医学科24名）、初代校長として玉利喜造教授（農学博士）（東京帝国大学農科大学教授）が任命されました。玉利喜造教授は高等農林学校設置委員会の委員長であり、実質的には玉利教授が盛岡市に設置を決定したと言われます。



盛岡高農創立時には、正門・門番所・教舎・寄宿舎（後の自啓寮）、家畜病院などがみられ、教舎は

南から第1教舎（農学科・校長室・事務室）、第2教舎（後の農芸化学科）、第3教舎（林学科）、第4教舎（獣医学科）となります。まだ本館は見当たりません。本館は大正元年12月に竣工。それに伴い構内が整備され、正門・門番所が現在地（現旧正門）に移設されました。本館は現在農業教育資料館（国指定重要文化財）として利用されています。

本館の外壁は、5期の色彩（淡青・濃青・濃茶・淡茶・淡ベージュ）からなり、賢治が学んだ頃の色彩（1期）は、灰水色・淡青色であることがわかりました。盛岡高農の第1校旗は学科体制をイメージした3色旗で、農学科（黄：稲・収穫）、林学科（緑：草・樹木）、獣医学科（赤：動物・血）を表しています。

盛岡高農創立時に下台に広大な植物園が設置され、そこには岩手山と早池峰山を模した石山（ロックマウンテン）や池が造築されました。その石山は現在でも見る事ができます。植物園のほか、果樹園・見本園・分科園・水田・畑・桑畑・苺畑・牧草地等がみられます。



(賢治は前列左から3人目)

盛岡高農農学科第2部本科生の時代(大正4年4月～)

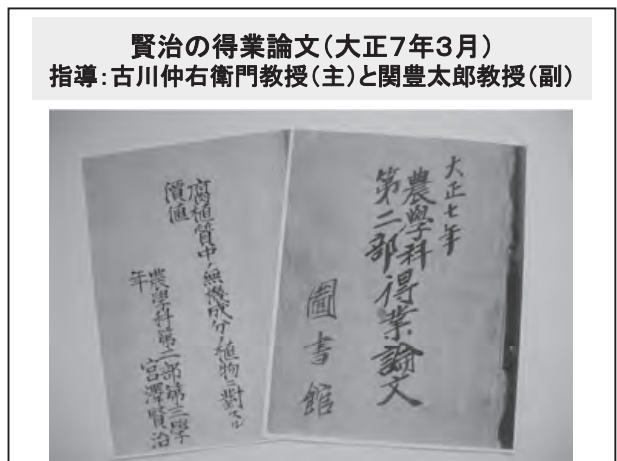
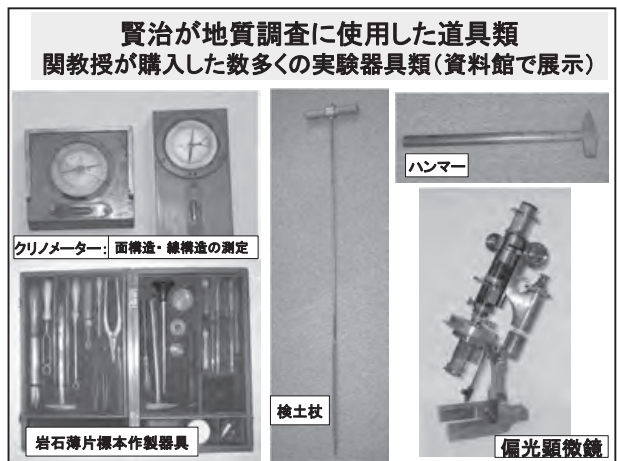
賢治は農学科第2部（後の農芸化学科）に入学（大正4年4月）。同級生は12名。創立時の寄宿舎は北寮と南寮の2棟からなり、1年生全寮制（室長・寮長は2年生）でした。賢治は1年生の時は南寮1号に入室（同室：高橋秀松ら）、2年生（大正5年）の時は南寮9号室（室長）で、同室者は宮澤賢治・伊藤彰造、保阪嘉内、岩田元兄、原戸藤一、萩原弥六でした。建学の精神は、玉利喜造初代校長の創立理念である「質実剛健・謹厳実直・勤儉自治・友愛互助」であり、寄宿舎生活もこの理念に則ったものでした。

地質及土壌学教室の関豊太郎教授は著名な土壌学

者（東京帝国大学農科大学卒）で、賢治の生涯の師となります。関教授はクーボー大博士のモデル（グスコブドリの伝記）とも言われ、生徒達からは「関教授は眼鏡をかけたすどい目つき、大きな声と短気ですぐ怒鳴り、気むずかしい“ライオン先生”」と敬遠されたと言われますが、賢治と関教授は相性がよく、賢治は関教授を尊敬し、関教授は賢治の才能や人柄を高く評価していました。

関教授は、赴任した時期は冷害凶作年のため、専門外の冷害気象・凶冷予知（ヤマセ）の調査研究に携わり、有名な「海温説」を唱えました。これは「関説」とも言われ、カムチャッカやベーリング海から南下する寒流（親潮）と北流する暖流（黒潮）が三陸沖で合流し「ヤマセ」が発生するとの説です。

また、関教授は、イーハトーブの地は「腐植質を含む不良性酸性火山灰土壌」であることに早くから注目、その土壌改良は「北上山地にある無尽蔵の石灰岩の利用で可能である」ことを論文や新聞紙上で啓発しています。この関教授の発想は、後の賢治に引き継がれます。



関教授や古川仲右衛門教授は、第2教舎の化学実験室で賢治ら生徒の化学実験を指導。私も同じ化学実験室で実験した最後の生徒（昭和37～38年）になります。地質及土壌学教室の関教授が購入した数多くの実験器具類が残されており農業教育資料館に展示されています。

その中には賢治が地質土性調査に実際に使用したであろう道具類も存在しております。当時賢治は岩石鑑定のため「岩根橋附近で採取した輝石角閃岩」の薄片標本を作製。その賢治作製の薄片標本は現存しており、偏光顕微鏡で覗くと美しい映像をみることが出来ます。

賢治の得業論文（大正7年3月）は、「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」で、指導は古川仲右衛門教授（主指導教官）と関豊太郎教授（副指導教官）の2人体制。得業論文の内容はどちらかと言えば、関教授の専門に近いものです。

盛岡高農農学科第2部本科生の時代(大正4年4月～)

多くの優秀な教授陣が赴任し人的に恵まれた学園となりましたが、中でも賢治にとって関教授が重要な存在となります。また全国各地から集った志ある友達との出会いも賢治に大きな影響を与えました。盛岡高農では、当時最先端の学問が教授され、中でも賢治が農芸化学（特に関教授の地質及土壌学）を専攻したことは、その後の賢治の生涯に大きな影響を及ぼしました。

この時期、賢治は関東関西修学旅行（伊勢志摩訪問・松井教授引率）、盛岡附近地質調査（クラス12名・関教授の指導）、秩父地質旅行（関教授・神野助教授引率）、江刺郡地質調査（関教授指導、高橋秀松同行）を行い、得業論文（古川教授と関教授の指導）「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」を提出、大正7年3月に本科を卒業しました。

盛岡高農研究科生の時代（大正7年5月～）

賢治は引き続き研究科生（実験指導補助）として在籍し、「稗貫郡地質及土性調査（関教授指導）」に参加します。研究科を修了するとき、関教授から助教として残るよう推薦されましたが辞退しました。

花巻農学校教師の時代（大正10年12月～）

心象スケッチ「春と修羅」を出版。花巻農学校生徒を引率して北海道修学旅行に出かけ、帰校後に「修学旅行復命書」を提出。その旅行中に「不毛な我が荒涼たる洪積不良土（黒ボク土）の改良」を痛感し、この問題が賢治の宿題となります。賢治は農学校教師をしていることに疑問と矛盾を感じ、「本当の百姓」になるとの思いで農学校を退職、下根子桜で独居生活を送り、羅須地人協会を設立します。

羅須地人協会の時代（大正15年8月～）

農民を対象に土壌・肥料・植物生理などを講義・指導。肥料設計事務所を開設し、肥料設計図2千枚を書いたと言われます。肥料及び稲作の相談に奔走、体の酷使で病に倒れ自宅療養。その結果賢治の羅須地人協会の活動は約2年半で挫折（昭和3年8月10日）することになります。

東北砕石工場技師の時代（昭和4年4月～）

賢治は「東北砕石工場技師になることの是非」について関先生に手紙で相談したところ、関先生から快諾を得て東北砕石工場に勤めることになります。東北砕石工場技師（工場主：鈴木東蔵）となった賢治は、石灰岩の採掘・製品開発・販売に奔走します。その背景には、関教授の念願であった「酸性火山灰土壌の石灰岩による改良」の課題があったと思われる。

「盛岡高農での学び」と「関豊太郎教授との邂逅」

盛岡高農の恵まれた物理的環境はまさに異空間・別世界であり、優秀な教授陣が教鞭をとる高度な人的環境、特に関教授との邂逅は運命的のものを覚えます。賢治が農学科第2部に入り関教授の地質及土壌学を専攻したことは、賢治にとり幸いの出合いであったと思います。また保阪嘉内・高橋秀松ら友達との交流や花巻農学校教師としての経験。賢治はその影響を受けて農業や農村問題にも次第に関心を持つようになりました。このように盛岡高農の時代は

賢治の生涯に決定的な影響を与え、岩石鉱物好きの「石っこ賢さん」は「科学者“賢治”」に変貌したと思います。

盛岡高農での学びと関豊太郎教授との邂逅

岩石鉱物好き「石っこ賢さん」>> 科学者「賢治」

盛岡高等農林学校：
物理的環境> 異空間
優秀な教授陣：人的環境
関豊太郎教授の存在
農学科第2部（農芸化学）
地質及び土壌学（関教授）
農業・農村問題への関心

関豊太郎教授 入学時の賢治 保阪嘉内ら友の存在

盛岡（盛岡高農）の時代>
> 賢治の生涯に大きく影響

賢治の逝去（昭和8年9月21日）

賢治は、「信仰（法華経）」と「自然科学（農芸化学・農業指導）」と「文芸（詩・童話）」という3つの世界を走りきって逝きました。

「雨ニモマケズ手帳」に遺された詩歌は、賢治の生涯の目標を詠ったものであり、死の直前の絶筆（昭和8年9月20日）は、「稗貫郡の大豊作を喜び、病にある身であるが、その命を衆生のためによろこんで捨てよう」との賢治の祈りであります。

- ・方十里稗貫のみかも稲熟れてみ祭三日そらはれわたる
- ・病のゆゑにもくちんいのちなりみのりに棄てばうれしからまし

「雨ニモマケズ手帳」

法を先とし
父母を次とし
近縁を三とし
農村を
最後の目標として
只猛進せよ
利による友、快樂
を同じくする友尽く
之を遠離せよ